

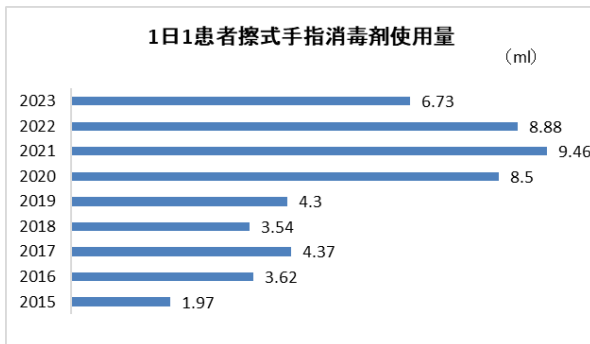
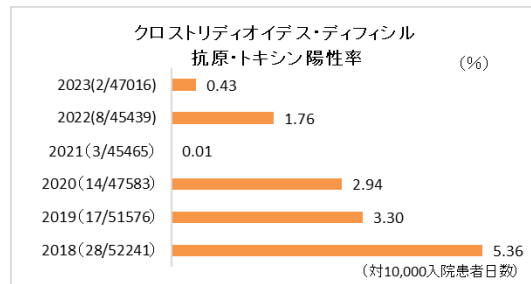
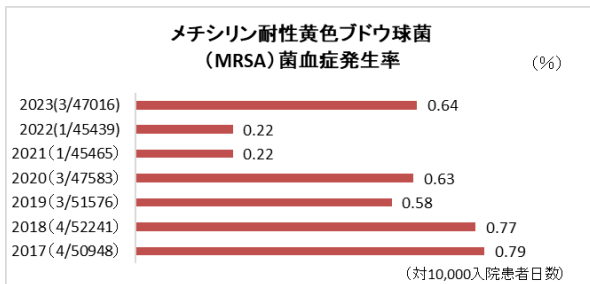
感染対策室統計

1) 抗菌薬の適正使用と微生物検査結果の活用を推進

広域抗菌薬と抗 MRSA 薬のモニタリングを継続し、入院経過と感受性結果などから症例検討を行い、用量の増減や狭域薬への変更についての提言を継続した。また、各科医師より薬剤科を通して抗菌薬加療に難渋する症例を ICT で検討する例が増えた。2023 年度は 77 症例に介入した。

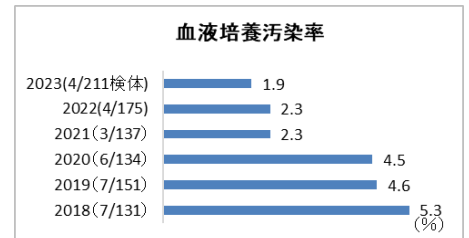
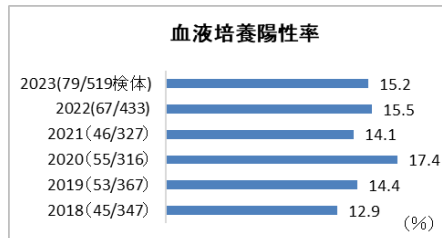
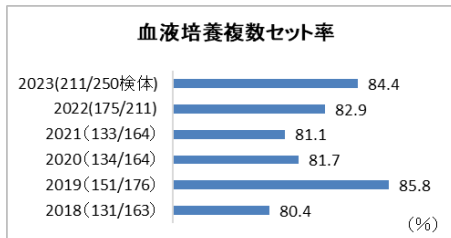
2) 標準予防策の実践

MRSA 菌血症発生率は 2021 年、2022 年と比べ増加していた。CD 陽性率は、昨年度と同様、減少を維持している。これらは、標準予防策（手指衛生・環境整備・個人防護具の適正使用）を継続して実践していくことが必要と考え、今後も標準予防策の継続した実践活動を推進していきたい。



3) 微生物検査精度の向上

血液培養検体提出数が増加し、複数セット率は 80%以上維持できていた。汚染率・陽性率などに大きな変化はみられなかった。これらは、手指衛生や標準予防策遵守のアウトカム指標として今後も評価を継続する。



4) 新興感染症への柔軟な対応

新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症への移行に伴い、院内での対応を緩和していく方向へとその都度、検討し見直しを図った。しかし、8 月、2 月、3 月と院内クラスターが発生したため、感染対策の強化を図り対応した。今後も初期対応の重要性を認識しながら、院内の実情に合わせた対応が必要と考える。